

# 原発災害 「復興」の影

■ 今を問う ⑩

避難してから初めて戻った富岡の家は、ネズミに荒らされ、床が抜けた場所もあった。富岡駅は津波で流されて、なかった。空きだくなったのを8月だっ

「いまも覚えている。詩に付け加えた言葉は いわき市に避難する警城は いつまでもふるさとを思い続けることだ。ただ桜が丘高2年秦原真子(16)はこの時、3月の県道博式で発表された詩の構想を既に

## 「完全な復興はない」 行政のお仕着せに距離感

に固めていた。「何の前触れもなく、唐突に思うこと路や施設が復旧しても、戻がある『帰りたい』ってない人がいれば、それは何というところない日、完全な復興ではないし、自覚だっただけでも、それで分かっている富岡でもなも楽しい毎日だった」。い。一方で「いつかは帰訪れた故郷の姿に『帰りたい』という気持ちも簡単に

するためだ。祖父の炭焼められたくない。震災、原発の事故は3年余で明らかなに広がっている。故郷と切り離された若者らそこに向き合っていくだけ、お仕着せの「復興」と聞ける。前向きな言葉に照れもまた距離を感じ始めてい

広がる「感覚のずれ」だ。高橋は少し笑った。若 震災、原発事故から聞も

「今を問う」おわり



桑原さんは「帰りたい」と思う一方で、とても感じているは難しい

い」との思いは正直揺らいは消えない。「いつか富岡の復興の担い手」のテーマは3年4カ月。賠償など

は今回でおわります。ご意見、感想をお寄せください。

◆郵便 郵便番号960-0186  
48 (住所不要) 福島県安新町 48 社報編集部「復興の影」係

◆フアックス 024-523-1657

◆電子メール kage@min.jp

「帰れない」との思いはとして大熊の文化財を保護つたら復興だ」と勝手に決を進めているが、住民の感

進学を考えている。学芸員「ルがあるけど、『こうなら、国など行政は「復興」の決めると高橋は言う。「行い、福島第一原発の隣炬現

場でのトラブルを抱えながら、福島の復興」には「これからの富岡でなくても」と元の富岡でなくても」復興という言葉は好きじゃ

れきや健康への考え方の違をめぐる避難者同士のあつ